

## 2 研修の技法（どのように研修するか）

研修のジャンルは、先に書いたように、多岐多様である。ここではわずかに校内研修のみを視野におき、その技法について考えてみたい。

教師は、ある学校に在籍することによって、数年間、他の教師たちと協同し連帯し、学校の教育目標の達成に専念する。学校は、教師たちにとっていわば運命共同体なのだから、校内研修は、教師たちの連帯感、学校への内的な共属の感情が醸成されるような雰囲気の中で行われなければならない。しかも、研修は、学び合い・共育の場と機会なのだから、ゆったりした時間と空間の感覚を享受できるように設定されなければならない。多忙な校務のあいだを縫うようにして、時間に追われてのおざなり研修が続けば、研修は空洞化し形式化し、何の成果も生み出さないだろう。校内研修の設営にさいしては、研修が本来もっている意味からして、行政サイドなかんずく学校内管理職のすぐれた見識と寛容が期待されることになるろう。

研修は学びの場であり、単なる伝達講習の場ではない。抑圧的で権威主義な雰囲気は、研修の本来的な在り方をそこなうことになる。学び合いの本質的条件は、風通しの良さ、遠慮のなさという民主性の薫風である。教師が自由に意見を開陳し、遠慮なく同感や共鳴を表現でき、相互批判が寛容に許容されるような雰囲気が必要である。萎縮や遠慮は、校内研修を空疎なものにするだろう。校内研修にあっては、教師たちがみずからを絶対視することなく相対化し、相互に屈託なく知識と技能と経験を交流できる雰囲気が保障されていなければならない。明朗闊達でおおらかな雰囲気での研修こそが、相互触発的に教師の静かな自己変革をうながし、明日からの教壇の授業を活性化し、学校全体の教

育を充実させることになるだろう。

もう一つ大事なことは、学校独自の個性的なスタイルと内容をもつ研修を創造することである。教師なら誰しも、子どもの個性の尊重を語り、子どもの秘められた豊かな可能性を口にし、その可能性を創造力に結びつけることこそが教育の使命だ、と熱っぽく語り続ける。その場合、教師は、なぜ自分の個性や可能性や創造性について語らないのだろうか。とうの昔に子どもであることをやめた教師には、個性は薄れ、可能性や創造性は涸渇したとでも言うのだろうか。それは、行き過ぎた自己卑下でしかあるまい。個性・可能性・創造性を教育のキーワードにする教師は、みずからの校内研修を個性ゆたかなものにする可能性を追求し、自分の学校に独自の研修会を組織できるよう創造性を発揮すべきであろう。校内研修が他校からの輸入品であったり物マネであったり、校内研修のたびに新鮮なメニューを用意できずにマンネリ化するとすれば、それは、教師の怠惰の証明でしかない。教師みずからが個性的なスタイルの校内研修を創造的に設営できないとすれば、子どもの個性と創造性を語る資格を失うことになるろう。

校内研修は、大ていの場合、授業内容や子どもの生活指導に関するものだ。パターン化され画一的になりがちだ。時には、校内研修が脱教科的であったり、生活指導とは無関係のものがテーマ化されることがあってもよいのではないだろうか。たとえば、「私の宮沢賢治論」「私は『銀河鉄道の夜』をこう読む」「『星の王子さま』をどう読むか」。「古典文学に現われるいじめの問題」「いじめ問題解決のヒント——ローレンツ『攻撃——悪の自然誌』を読んで」といった研究報告と討論があってもよいだろう。「この夏、私はヨーロッパ——私は異文化をこ